

## マガジン執筆者訪問記（1）陶芸工房八鳥

2021年1月、自家用車で国道24号を南下し、城陽ICから京奈和自動車道へと進んだ。助手席にはマガジン編集員の千葉さんを乗せ、目的地は陶芸工房八鳥。対人援助学マガジンの巻頭に毎号掲載されている「ハチドリの器」の執筆者、見野大介さんを訪ねる道中だった。

「ハチドリの器」はマガジン18号から連載開始。21号からは巻頭に移り、優しい色合い、美しい文様の器たちが読者を出迎えている。



ハチドリの器 4

見野 大介 Mino Daisuke



対人援助学マガジン第21号「ハチドリの器4」より

実は、訪問時点でマガジン訪問記にするつもりであったわけではない。新型コロナウイルスの第3波が拡大し、年末年始の帰省等の自粛が求められる中、ぽっかりと空いてしまった時間を何か有効に使えないかと考え、ひとまず「久しぶりに会って話ませんか」という約束で実現した訪問であった。

京都から約1時間、平城宮跡のほど近くにある陶芸工房八鳥に到着した。もともと喫茶店であった建物を改装したとのことで、全面張りのガラスからの採光は素晴らしく、工房内はとても明るい。机や棚には皿や茶わん、マグカップ、花器などの陶器が並べられ、日によっては陶芸教室も行われている。

## 福祉つながり

さて、現在は陶芸家として活動する見野さん。千葉編集員、大谷編集員とのつながりはマガジン以前にさかのぼる。

以下は、見野さんが初回連載の執筆者短信に記したご自身の略歴である。

陶芸工房 八鳥 hachi-dori

陶歴

1980年 大阪に生まれる。

2003年 近畿大学建築学科卒業。

2005年 京都伝統工芸専門学校陶芸科卒業。京都炭山、笠取窯岡本彰氏に師事。

2011年 奈良県奈良市法華寺町にて独立。特定非営利活動法人 京都ほっとはあとセンターより「ものづくり支援員」に任命され、社会福祉法人テnderハウスへ出向する。

2012年 第18回新美工芸会展 大阪市立美術館館長奨励賞



見野さんとのつながりの一つが、福祉つながりである。千葉・大谷の両名も、昨年度まで京都市内の社会福祉法人に勤める福祉職員であった。見野さんが社会福祉法人テnderハウスに出向されていた頃、千葉さん周りの福祉職（等）の人たちでボウリング大会をやったことをきっかけに、しばらくはボウリングで集まることがあったのがもう一つつながり、そして、このマガジンも近年に新しくできたつながりです。ちなみに見野さん、細身ながら、すさまじい剛腕ボウラーでした。陶芸家の腕力を侮ってはいけないそうです。

特に何か予定して伺ったわけではないので、久しぶりに近況やら昔のことやらをあれこれ話していたのですが、そのひとつひとつがとても面白く、この辺でようやく正月ボケした私の頭にも“これ、訪問記にしたらいんちゃうん!?”という声がかげびました。そんなわけで、事後的に原稿を仕上げ、見野さんにも確認してもらい、「訪問記」としてお届けする次第です。

## 陶芸と福祉

最初に出会った頃は、見野さんが独立後、福祉施設でも仕事をしていた時期でした。障害者福祉の領域では陶工というのは作業所などで作られる製品のひとつとして馴染みのあるもので、見野さんが福祉施設での仕事をしていることも『そういうこともあるのか』くらいにしか認識していませんでした。特別支援学校では、高等部になると就業を見越した作業学習が取り入れられていますが、その中でも「木工」や「陶工」、「清掃」などはどこの学校にもあるメジャーどころかなと思っていました。

## 福祉とものづくり

見野さんは福祉施設での仕事について「とてもよかった」と話されます。話された言葉そのものではなく私の理解した言葉で言えば「デザインや技術をどのように製品にするか、突き詰めて思考する機会になった」ことをポジティブにとらえておられるのかなと思いました。利用者の方に陶器を作ってもらった時、できあがるものは「製品」、つまり販売に耐えるものでなくてはなりません。さまざまな制約のある中で、利用者の方にどう「製品」を作ってもらえるか、試行錯誤を重ねられたそうです。



福祉施設での仕事で着想された製品のひとつ「ペン立て」。個性ある表情が楽しい。

そのような「試行錯誤」は、何も福祉施設での仕事に限って行うことではないそうです。独立後の工房には、弟子入りしていた時の工房にあったものがなかったり、まだ身につけていない技術もあります。今目の前にある環境と、今の力で、それでも「製品」を生みだして

いくにはどうすればよいか。試行錯誤を重ねる日々は今も続いているそうです。このことは、陶芸に限らず、あらゆる仕事に通じることのようにも思いました。その上で、私たちは自分が仕事で生み出す「価値」や「意味」についてどこまで考えることができているか…問われている気がしました。

### 「だってプロがいないでしょ」

いつだったか忘れてしまいましたが、見野さんがこう話されていたことが印象に残っています。つまり、福祉施設ではさまざまな製品を作っていますが、製品づくりのサポートをしているのは福祉施設職員で、つまり陶芸や木工に関しては、基本的に素人です。もちろん、これまでの経験から、まったくの未経験者とは比べるべくもないと思いますが、「プロ」かと言われれば、やはりそうではないでしょう。

私たちは普段、ほとんどのものを「プロ」が作った中から購入します。であれば、福祉施設における製品作りにも、本来はプロの力を借りる必要があるのではないか。もし、そんなことさえ考えなかったとしたら、私たちやこの社会は、福祉施設の「製品」をどのように捉えていたのか…。ここでも改めて考えさせられました。



## 陶芸工房×SNS

コロナ禍は、陶芸工房八鳥にも、もちろん影響を及ぼしました。緊急事態宣言中は、陶芸教室は中止。個展なども開催できません。百貨店でのギャラリーや催場での個展を開催されたとのことですが、百貨店自体の来客も減少しており、「笑えるくらい来なかった」こともあるそうです。

そんな中、従来と変わらず機能したのはオンラインの方であったと言います。一方で、それが可能なのは、従来からオンライン上での認知を獲得しているからにほかなりません。急場しのぎで慌ててオンラインショップや SNS での展開を始めたとしても、必ずしもうまくいくとは言えないようです。

個人や個人事業主がさまざまな形で発信することが可能になった現在、陶芸の世界でも若い年齢層の人が独立して事業を始めるケースが増えてきているそうです。これも、時代の変化のひとつです。時には、SNS のダイレクトメッセージで、独立を考える人からの相談が寄せられることもあるとか。後進の育成も、これまでとはまた違った形で進んでいくのかもしれない。

Web マガジンという形で、オンラインで展開してきた対人援助学マガジンの編集員としても大きく刺激を受けるところでした。



千葉編集員（左）と見野さん（右）

その他、仕事場を見学させてもらったり、弟子入り時代のエピソードもお聞きし、夕方までとっぷりと話し込んでしまいました。「口下手だから…」と口にされるものの、落ち着いた雰囲気とテンポで話されるエピソードはどれも楽しく、時に驚くようなものもあり、時間を忘れます。



ぜひまた伺いたいです。ありがとうございました！！

(文：大谷多加志)